令和５年度　愛知県医療療育総合センター県民講座の開催について

～発達障害をささえるICT技術～

2024年１月27日（土）に、名古屋市栄の電気文化会館イベントホールにおいて、令和５年度愛知県医療療育総合センター県民講座を開催しました。「発達障害をささえるICT技術」をテーマに、東京大学先端科学研究センターの中邑賢龍先生による特別講演に加え、愛知県医療療育総合センターが主体となって構築している障害者診療・支援のためのネットワークシステム「このはネット」の紹介講演が行われました。

前半の「このはネット」の紹介では、まず新美中央病院長が「このはネット」の概要を説明し、現代のチーム医療実現のために情報共有は必須であり、中央病院のスマートホスピタル化の一環として、「このはネット」の運用が開始された経緯を紹介しました。

同じく中央病院の丸山小児神経科部長は具体的な病院での運用は、「リハビリテーション部門」、「胃ろう・栄養部門」、「遺伝診療部門」、「子どものこころ部門」、「在宅人工呼吸療法部門」の５部門で行われており、どのような障害を有するお子さんたちに関してどのような情報が共有されているかを紹介しました。

ウィルケア訪問看護ステーションの馬瀬口理学療法士は保護者を介さずに医療的な必要情報が得られる利点を、春日台特別支援校の日谷教諭は支援校（院内学級）と児童が入院している病棟との情報共有に有用であることを紹介しました。

中邑先生の特別講演では、最初に障害による社会的活動参加への制約は時代・社会の変化により変遷するものであり、これからは障害を障害（Disability）ではなく誰もが持つ困難さ（Difficulty）の延長線上のものと捉えていく考え方がインクルーシブな社会を実現するために必要であることを話されました。そのうえで、障害の種類に関係なくそれぞれが持つ困難さを克服するために、現代のテクノロジーを利用することが有用であり、それはまた障害のあるなしに関係なく、すべての子供に「個別最適な学び」を提供することに繋がることを述べられました。実践事例として高機能自閉症やアスペルガー障害の児童にスマートフォンを駆使して小旅行に挑戦してもらう様子を動画で紹介し、彼らが不安を克服しながら成長を見せる様子が示されました。このような実践的研究が発達障害を有する児童に自信を持たせる良い機会になり、非常に有用であることが良く分かる内容でした。

参加された保護者や支援者からの評判も上々で、「このはネット」を知らなかったので自分の子供のために利用したいといったご意見や、中邑先生の実践研究に自分の子供も参加させてみたいといったご意見が講座のあとで寄せられました。

医療療育総合センター　発達障害研究所長
中山　敦雄

KONOHA net.